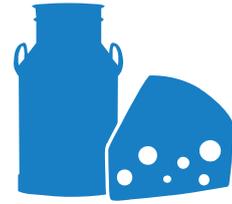


牛乳・乳製品



◆飼養動向

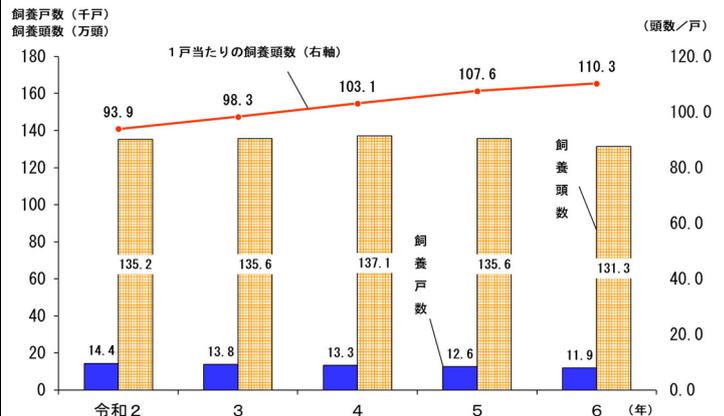
6年2月現在の乳用牛飼養頭数、前年比3.2%減

乳用牛の飼養戸数は、酪農家の高齢化や後継者不足、経営不振などにより離農が進んでおり、令和6年は、前年を700戸下回る1万1900戸（前年比5.6%減）と減少した（図1）。

飼養頭数は、4年まで5年連続で増加した後、5年は減少に転じ、6年も131万3000頭（同3.2%減）と、前年を下回った。

一方、1戸当たり飼養頭数は、110.3頭（同2.5%増）と前年からわずかに増加した。3年連続で100頭を超え、引き続き経営の規模拡大の進展が見受けられる。

図1 乳用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



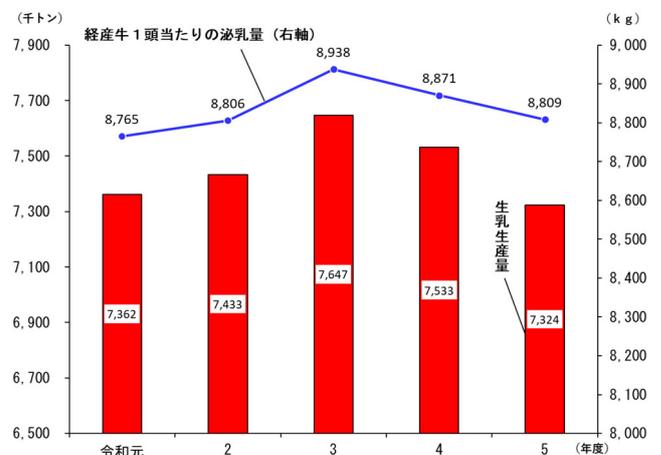
資料：農林水産省「畜産統計」
注：各年2月1日現在。

◆生乳生産

5年度の生乳生産量、前年度比2.8%減

令和5年度の全国の生乳生産量は、生産者団体による生乳生産抑制の取り組みや夏場の猛暑の影響などにより、732万3689トン（前年度比2.8%減）と2年連続で前年度を下回った（図2）。経産牛1頭当たりの泌乳量は、8809キログラム（同0.7%減）となった。

図2 生乳生産量・経産牛1頭当たりの泌乳量の推移（全国）



資料：農林水産省「畜産統計」、「牛乳乳製品統計」
注：経産牛1頭当たりの泌乳量は、畜産統計および牛乳乳製品統計のデータを基に機構にて算出。

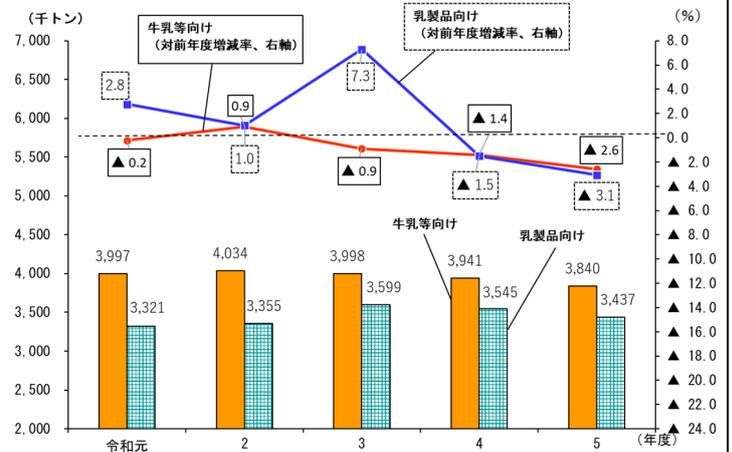
◆用途別生乳処理量

5年度の乳製品向け処理量、前年度比3.1%減

令和5年度の用途別生乳処理量を仕向け先別に見ると、牛乳等向けは383万9835トン（前年度比2.6%減）と3年連続で前年度を下回ったものの、生乳生産量の減少により、市乳化率（生乳生産量に占める牛乳等向け処理量の割合）は52.4%と、前年度から0.1ポイント上昇した（図3）。

また、乳製品向け処理量は343万6603トン（同3.1%減）と、2年連続で前年度を下回った。

図3 用途別生乳処理量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

◆乳製品向け処理量

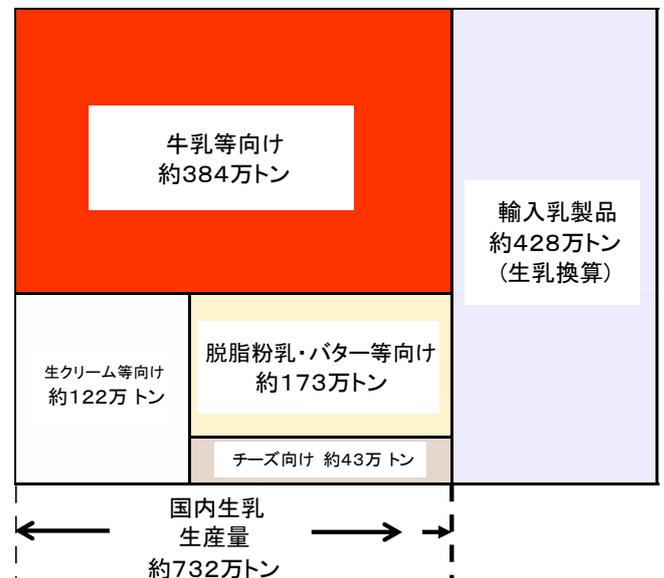
5年度の脱脂粉乳・バター等向け生乳処理量、前年度を下回る

令和5年度の生乳の需給構造を見ると、国内生乳生産量の52%が牛乳等向け、47%が乳製品向けに仕向けられた（図4）。

このうち乳製品向け処理量を区分別に見ると、脱脂粉乳・バター等向けは約173万トン（前年度比4.5%減）、チーズ向けは約43万トン（同4.8%減）、生クリーム等向けは約122万トン（同0.8%減）と、いずれも前年度を下回った。

また、輸入乳製品（生乳換算）は、約428万トンと4年連続で減少した。

図4 生乳の需給構造の概要（令和5年度）



資料：農林水産省「畜産・酪農をめぐる情勢」

注1：国内生乳生産量の中には、このほか、その他の用途向け（約5万トン）の生乳がある。

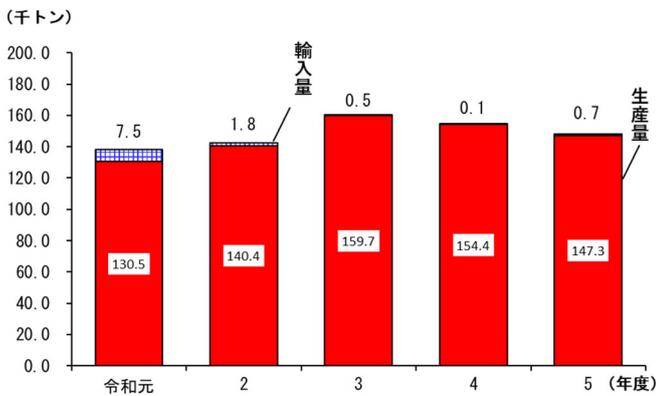
注2：生クリーム等向けは、生クリーム・脱脂濃縮乳・濃縮乳に仕向けられたものをいう。

◆ 脱脂粉乳

5年度の民間期末在庫量、前年度比26.1%減

令和5年度の脱脂粉乳の生産量は、14万7250トン（前年度比4.6%減）と、生乳生産量の減少に伴い、2年連続で前年度を下回った。また、同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、660トン（同624.4%増）となった（図5）。

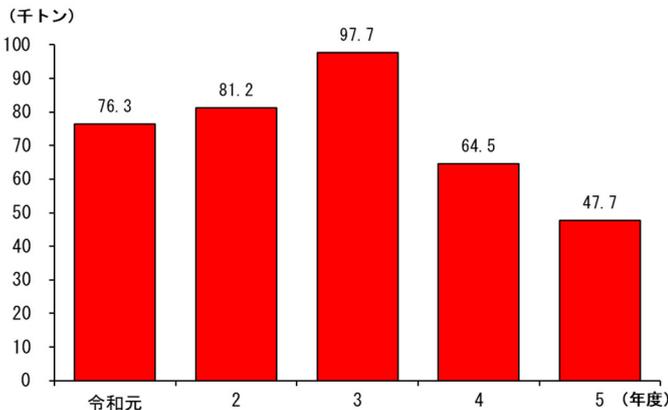
図5 脱脂粉乳の生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構調べ
注：輸入量は機構輸入分のみ。

こうした中、5年度の推定出回り量は、16万4764トン（同12.2%減）と前年度からかなり大きく減少したものの、在庫低減対策等の取り組みの効果により、5年度末の民間期末在庫量は、4万7681トン（同26.1%減）と2年連続減少した（図6）。

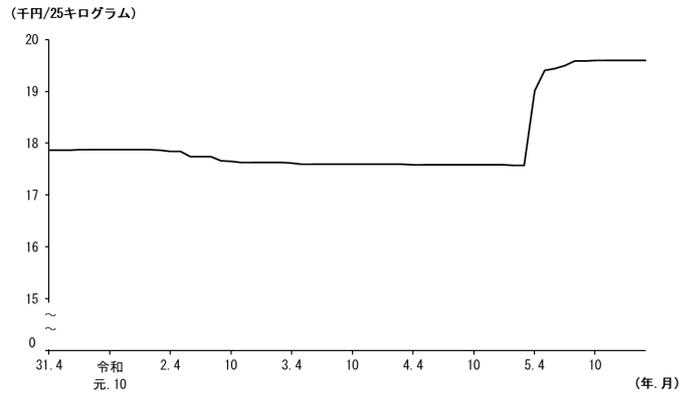
図6 脱脂粉乳の民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

5年度の脱脂粉乳の大口需要者価格は、25キログラム当たり平均1万9511円（同11.0%高）と、乳価改定の影響により前年度からかなり大きく上昇した（図7）。

図7 脱脂粉乳の大口需要者価格の推移



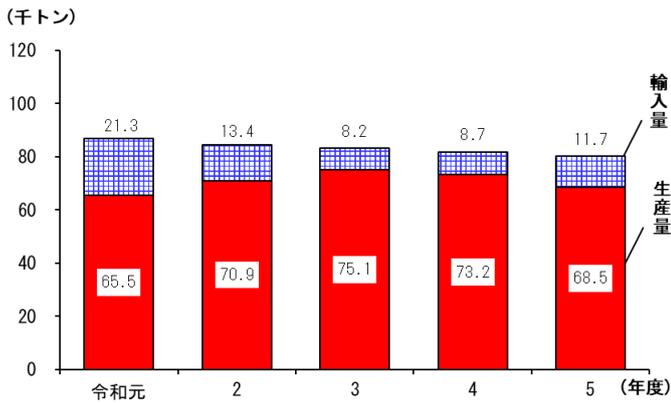
資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」
注：消費税を含む。

◆バター

5年度の生産量、前年度比6.4%減

令和5年度のバターの生産量は、6万8455トン（前年度比6.4%減）と、脱脂粉乳と同様、2年連続で前年度を下回った。同年度の輸入量（機構輸入分のみ）は、1万1738トン（同35.2%増）と大幅に上回った（図8）。

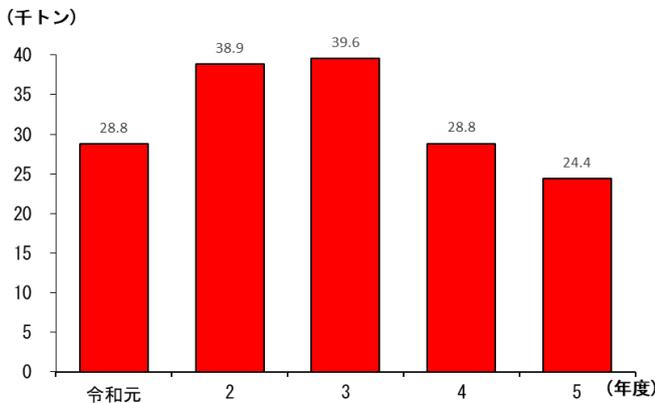
図8 バターの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構調べ
注：輸入量は機構輸入分のみ。

同年度の推定出回り量は、8万4845トン（同8.6%減）とかなりの程度減少した。また、同年度の民間期末在庫量は2万4425トン（同15.3%減）と、生産量の減少などからかなり大きく減少した（図9）。

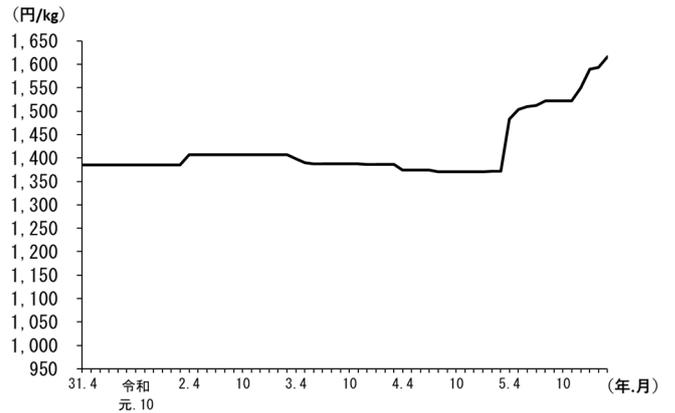
図9 バターの民間期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

5年度のバターの大口需要者価格は、1キログラム当たり平均1537円（同12.0%高）と、乳価改定の影響により前年度からかなり大きく上昇した（図10）。

図10 バターの大口需要者価格の推移



資料：農林水産省「大口需要者向け価格の動向」
注：消費税を含む。

◆チーズ

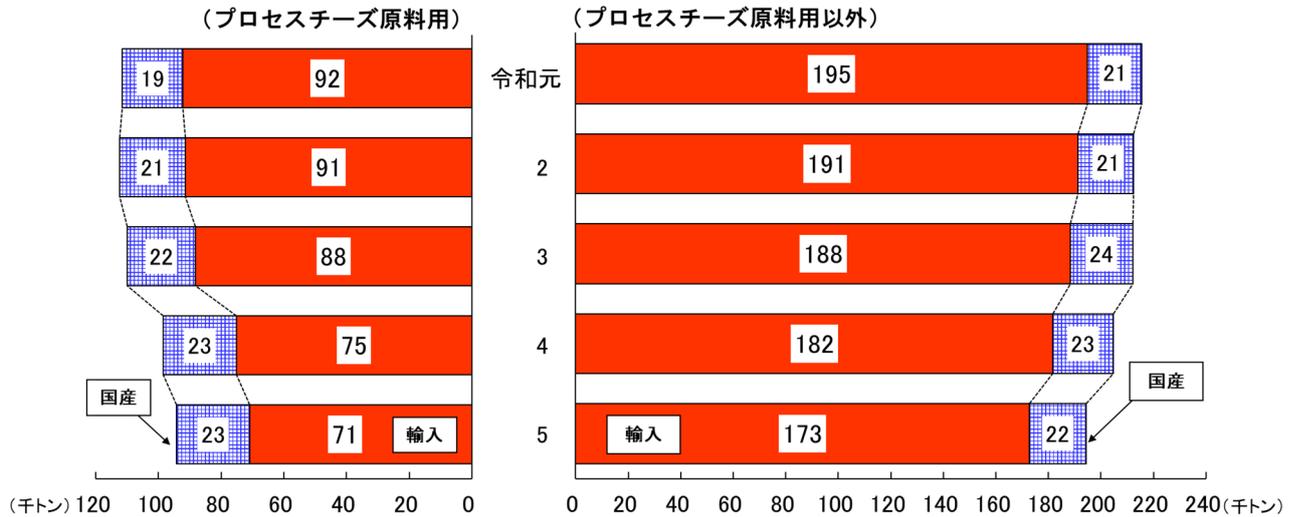
5年度の総消費量、前年度比6.0%減

チーズの生産量・輸入量

令和5年度の国産ナチュラルチーズの生産量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)は、4万5146トン(同2.2%減)と前年度からわずかに減少した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が2万3377トン(同0.4%増)とわずかに増加した一方、プロセスチーズ原料用以外が2万1769トン(同4.9%減)とやや減少した。

ナチュラルチーズの輸入量(プロセスチーズ原料用+プロセスチーズ原料用以外)は、24万3452トン(前年度比5.2%減)とやや減少した。内訳を見ると、プロセスチーズ原料用が7万807トン(同5.8%減)、プロセスチーズ原料用以外が17万2645トン(同5.0%減)といずれもやや減少した(図11)。

図11 ナチュラルチーズの生産量・輸入量の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」

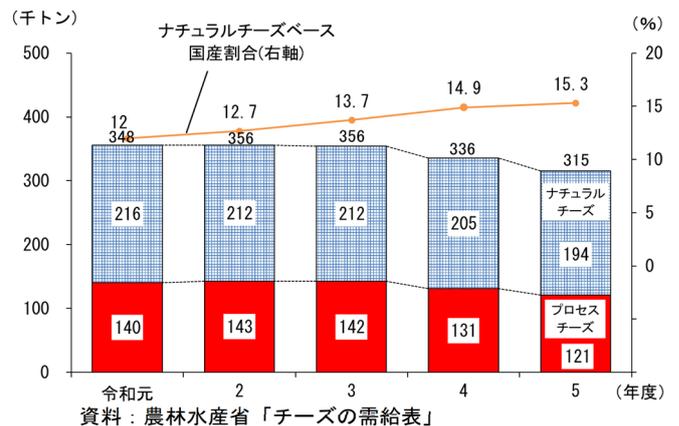
注：プロセスチーズ原料用以外とは、直接消費量、業務用、その他原料用として使用された量。

チーズの総消費量

令和5年度のナチュラルチーズ消費量は、19万4414トン(前年度比5.0%減)となった。また、プロセスチーズ消費量は、12万1044トン(同7.6%減)となった(図12)。

この結果、ナチュラルチーズとプロセスチーズを合わせた総消費量は31万5458トン(同6.0%減)とかなりの程度減少した。

図12 チーズの総消費量と国産割合の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」

チーズ総消費量の内訳

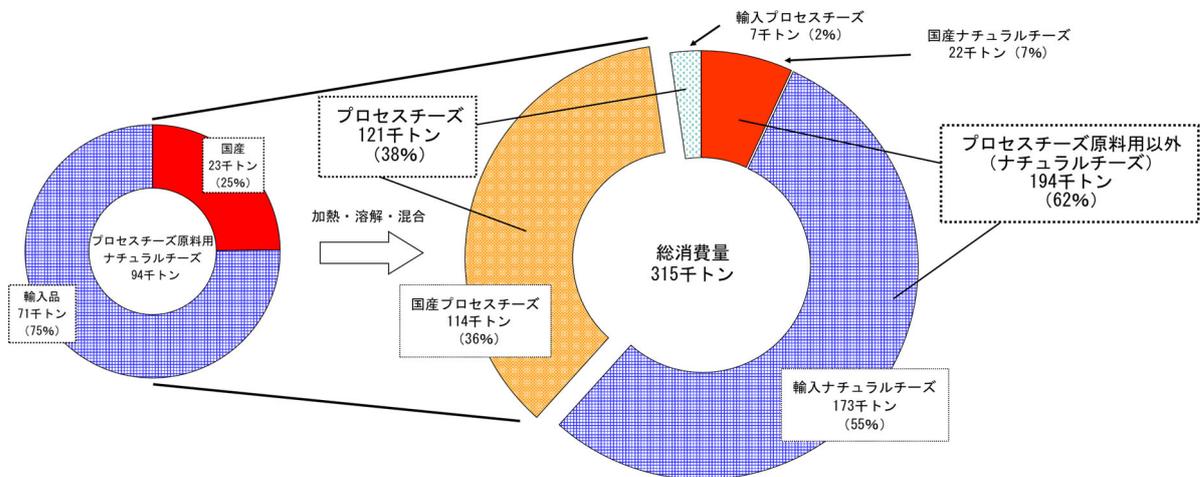
令和5年度のチーズ総消費量に占める国産チーズの割合は、国内生産量が増加した一方、輸入が減少したことから15.3%（ナチュラルチーズベースに換算した場合の自給率）となり、前年度より0.4ポイント上昇した。

チーズ総消費量のうち、プロセスチーズ原料用以外のナチュラルチーズについては、国産が2万1769トン（前年度比4.9%減）、輸入品は17万2645トン（同

5.0%減）とともに前年度をやや下回ったことから、国産の割合は11.2%と前年度並みとなった（図13）。

また、プロセスチーズ原料用のナチュラルチーズについては、国産が2万3377トン（同0.4%増）と前年度をわずかに上回り、輸入品が7万807トン（同5.8%減）とやや下回ったことから、国産の割合は24.8%と前年度より1.2ポイント上昇した。

図13 令和5年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省「チーズの需給表」
 注1：プロセスチーズ原料以外とは、直接消費量、業務用、その他の原料用として使用されたもの。
 注2：四捨五入の関係で、必ずしも合計値が文中の数字と一致しない。

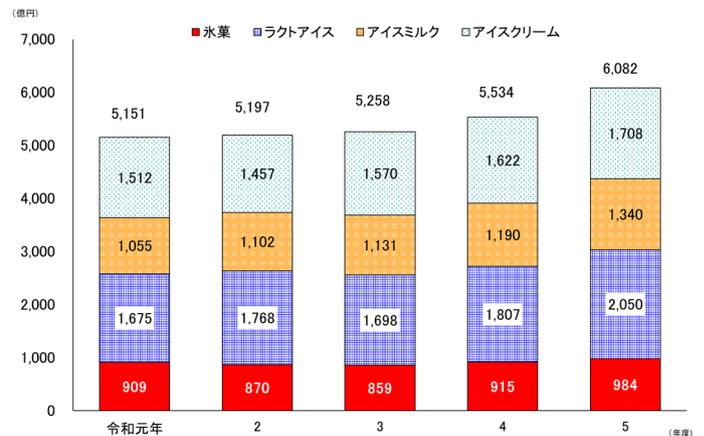
◆アイスクリーム

5年度の販売金額は過去最高

令和5年度のアイスクリームの販売金額は、6082億円（前年度比9.9%増）と、過去最高となった。（図14）。この要因としては、最需要期（7～9月）の安定した販売と、価格改定に伴う販売単価の上昇によるものとみられている。

需給動向を見ると、国産アイスクリーム生産量は13万6921キロリットル（同2.3%減）とわずかに減少したのに対し、輸入量は、6409トン（同9.2%増）とかなりの程度増加した。

図14 種類別アイスクリームの市場規模の推移



資料：一般社団法人日本アイスクリーム協会「2023年度 アイスクリーム類及び水菓 販売実績」、農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」